



東西しらかわ小学校長会 広報部

第 12 号	令和6年	2月	7日
発行人	会 長	室井	博人

第63回東北連合小学校長会研究協議会 山形大会に参加して

西郷村立熊倉小学校長 山川 晃司

令和5年7月6日(木)～7日(金)、「自ら未来を拓きともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を大会主題に掲げ、標記大会が開催されました。昨年度の岩手大会に続き参集型で行ったこの大会には、東北6県から1,000人近い会員が集い、東西しらかわ小学校長会からも17名が参加してまいりました。

ユネスコ創造都市として駅周辺の再開発が進んだ山形市は、おそらく10年以上ぶりに訪れた私にとって、とても新鮮で魅力的な街でした。2020年5月にオープンした駅に隣接する「やまぎん県民ホール(全体会場)」を始め、駅から徒歩圏内に新築・増改築されたばかりのホテル(うち3ホテルが分科会場)や公共施設が集約されていて、カーボンニュートラルを目指した街作りのコンセプトが明確に伝わってきました。

そのようなすばらしい環境の中で、第1日目は開会行事、全体会、記念講演が行われました。記念講演では、地元企業のオリエンタルカーペット株式会社代表取締役社長 渡辺博明 氏の「ものづくり ことづくり そして新型コロナ禍での挑戦」と題した講演を拝聴しました。渡辺氏の会社は、絨毯と似ていてそれよりも厚く重い「緞通(だんつう)」という敷物を作っている会社で、「山形緞通」という名で世界的に有名なブランドに育て上げた実績があります。その創業から現在に至

るまでの企業努力や未来に向けた企業戦略等についてお話をいただきました。

コロナ禍をもチャンスと捉え、変革を恐れずに信念をもって進むことの大切さ、現場を巻き込んで人との絆を大切にして事業を進める大切さを改めて心に刻むことができました。

さらに、受け継がれてきた不易なことを大切にし続け、時流に即した変革を英断・実行し、新たな価値を見だして挑戦し続ける渡辺氏の姿は、学校経営を担う我々校長がめざす姿に通ずるものでありました。教育の本質である「人作り」「人材育成」の実現と、これからのよりよい学校経営の推進に向けて、とても貴重な講演でした。

1日目の夜は、山形の郷土料理や地酒を味わいながら、参加した県南地区の校長先生方と情報交換・懇親を深めることができ、大変有意義な時間となりました。また、コロナ禍以降、再びこのような会を開催できるようになったことに喜びを感じたひとときでもありました。

第2日目は、10の分科会に分かれ、視点に沿った研究発表とそれに基づく小グループでの協議を行いました。私は、第10分科会において「地域と共にある学校づくりのための連携・接続と校長の在り方」と題した西郷班校長会の実践研究を発表させていただきました。この研究は、まず令和3年度に本校がコミュニティ・スクールとしての先行実践を行い、成果と課題を校長会で分析しました。そして、その結果を生かしながら令和4年度から各校での特色あるコミュニティ・スクールの導入・実践に結びつけたものです。

平成29年にコミュニティ・スクールの設置が法的に努力義務化されて以降、全国の自治体でその導入や準備が加速している中、今回、本村の取組を広く発信し、たくさんのご指導・ご意見をいただけたことは大変貴重な機会となりました。

この研究の礎を築いてくださった前西郷班の先生方、そして全面的にバックアップしてくださった東西しらかわ小学校長会の先生方に深く感謝申し上げます。なお、当日使用したプレゼンを YouTube で限定公開しておりますので、下の URL または右の QR コードからご覧いただければ幸いです。
<https://youtu.be/8ZpbXtCz3GI>



ある繰替休業日の1日

東西しらかわ小学校長会副会長 西牧 泰彦
(白河市立白河第一小学校長)

昨年11月、繰替休業日を利用して富山市立堀川小学校の授業を参観してきました。私個人としては、今回で3度目となる訪問でしたが、20年の時を経ても変わることのない、「自己をみつめ見直し、追究を深める子どもの姿」と「子どもの追究状況を捉え、寄り添い、励まし、助言等の支援にあたる教師の姿」を見ることができ、新たな感銘を受ける機会となりました。

堀川小では、現在「自己をひらく授業」を研究主題として掲げ、一人ひとりの子どもの自己への気づきや理解を促し、生き方を深めていく授業の在り方を求めて研究が進められていました。その実践は極めてシンプルで、「自己をひらく」についての定義のもと、「自己をひらく授業」の要件を問い直すことを通して、堀川小が大切にしてきた子どもが自ら学び、成長していく授業の在り方を明らかにしようとするものでした。このことは、かつて先輩教師から伺った「堀川小の研究は、目標・追究・教材の関連とそのはたらきを重視し、子どもが目標に主体的にたち向かっていく授業が基調である」の言葉通り、一貫性のある実践が続いていることを示すものでした。

本校の教育実践研究の原点は、今から58年前に堀川小を視察した諸先輩方が、「教育の原点はここにある」と感動した授業が始まりであるとされています。今回、有志参加で、初めて堀川小の授業を参観した本校の若い教師の中にも、同じような感動を覚え、今後の実践に対するモチベーションの高揚を感じた者が少なくないのではないかと思います。「百聞は一見にしかず」、生き生きと主体的に学ぶ子どもの姿は、理屈や言葉を通り越して、理想を追い求める教師の生命に火を灯すのだということを感じました。

私自身、本校独自の文化や教育理念をあらためて見つめ直すとともに、子どもを真ん中にした同僚性と協働性に基づいた教師相互の学び合いのある学校づくりに向け、教諭時代には無理でも、校長の立場からチャレンジできることがあるという視点を堀川小の授業から学ぶことができた貴重な1日となりました。

人と折り合いをつける力を育てたい

東西しらかわ小学校長会副会長 稲川 竜寿
(白河市立白河第二小学校長)

車での送迎が多く、本校では近隣の渋滞を避けるため、やむなく校庭の一部を開放しているが、校庭の環境保全と子供の安全確保が課題である。

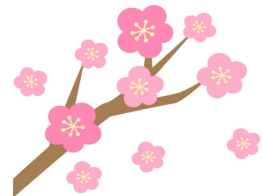
車で送迎されている子供は、家の玄関から昇降口まで、季節の移ろいや香りなど自然の刺激を受けない生活をしている。通学路の途中など、屋内では感じられない多くの刺激があるのに…。私は、徒歩通学の良さを少しでも分かっていたため、朝会では時々、自然の話をしている。

また、最近子供にも大人にも自己主張が強く、人と折り合いをつけることが苦手な人が増えているように感じる。

昭和の子供は、公園や田んぼ、里山で自由に遊んでいた。登下校も友達とお話ししながら通っていた。そのような中で、時には友達とけんかもしながら、自らトラブルを乗り越えることで、少しずつ人と折り合いをつける力を身につけていったような気がする。

今は、公園でボール遊びはダメ、田んぼに入ってはダメ、里山は危ない、心配だから登下校は車で送迎。それでは友達と一緒に外で遊ぶ機会がない。友達とのトラブルは、子供たち同士で折り合いをつけるまで待たず、すぐに親や教師が介入。それではいつまでも人と折り合いをつける力が育たないような気がする。もちろんトラブルの内容にもよるが…。

大人に外遊びを奪われた子供は、家でゲームやSNSで過ごすしかないが、それもダメ。何をすればいいのか…。大人の答えは将来のため勉強しなさいである。私には今を犠牲にした将来があるとは思えないが…。子供の立場になったらため息が出る。そういう子供の生活環境をつくってしまったのは、私たち大人である。私も大人としての責任と無力さを感じ、反省している。だから、休み時間だけでも先生方に子供と一緒に校庭での外遊びを勧めている。



学びの先にあるもの

県南に感謝

東西しらかわ小学校長会副会長 藤田 篤
(棚倉町立棚倉小学校長)

昨年の暮れに OECD (経済協力開発機構) による「PISA2022」の調査結果公表があり、「日本が3分野(数学的リテラシー・読解力・科学的リテラシー)全てにおいて世界トップレベルに!」という報道を目にしました。しかし、そのかげに「学びに対する興味関心の希薄さ」「将来との関連性が見えないままでの学び」「受験終了後に滑落する『知』の危険性」があると言われています。

私たちは、常に学習や生活指導の工夫・改善に取り組んでいますが、ややもすると「型」や「正解」の指導に拘泥する事態になりかねません。ただ、決して「型」や「正解」がよくないということではありません。「型に宿るころ」とあるように、「型」に「心を注ぐ」ことが大切であり、「正解」に他の「真価」や「納得」が得られればよいのですが・・・

どちらにも共通して言えることは、「学びの意義」を自覚することであり、「促進の言葉」に関わることです。

本校の授業の中での場面です。5年生の算数(割合)の単元で文章題の中に「増量前の量の120%」という言葉が出てきますが、日常的に目にするのは「20%増量」ではないでしょうか。先生がそうしたことにもふれることにより、子どもたちは「スーパーで探したい」と日常生活との関連で算数の「学び」のよさを自覚していました。また、1年生の学級活動では、「忘れちゃいました。」という子どもの発言に『忘れちゃいました』が、言えるのもすてき!と先生が声かけをする場面がありました。先生の愛情たっぷりの関わりが「促進」の心につながります。

「リスクリング」や「ウェルビーイング」という言葉が聞かれる昨今、「おもしろいなあ」「役に立つなあ」という「実感のある学び」や「肯定的・対話的な関わり」による「促進の心をつなぐ学び」の重要性が高まってきています。

「学びの先にあるもの」・・・それは、「実感のある学び」や「促進の心をつなぐ学び」を繰り返し、生涯にわたって続く「学び」という営みの本質を捉えることではないでしょうか。

白河市立白河第三小学校長 室井 博人

38年間の教員生活で会津出身の私は、31年間に県南で過ごさせていただきました。初任が表郷小でその後白三小、そこから東白川へ。途中南会津に2年間。東白には14年間通いました。

教頭昇任の時、校長室で県中の中学校教頭と言われました。ソファから落ちそうになり、「中学校なんて絶対無理です。」と断ると「決まったことだから断れない。大丈夫だから。」と言われ、須賀川の稲田中に赴任しました。行った日から喫煙事件があり帰ってきたのは夜中の12時をとうに過ぎていました。3日ぐらいそれが続き「ここで死ぬんだな。」と思いながらの勤務でした。中学校は小学校と全く文化が違いました。大変なことが多かったですが、とても勉強になりました。

その後白河市の教育委員会に勤めましたが、この中学校の経験がとても役だったと思っています。教育委員会では、まだ放射線への不安が残る中での業務や議会対応、入札の仕事など、学校では経験できないいろいろな仕事も行うことができたことは、自分の世界を拓けることにつながったと思っています。

その後校長としての3校でもたくさんの思い出を作ることができました。特に白三小ではエピソードに事欠きませんが、紙面の都合で書けないのが残念です。

今思い返すと、私はなんて周りの人に恵まれたのだろうと思います。教諭時代の校長先生はじめ、先輩の先生方、子どもと保護者、地域の方。多くの方が支えてくださいました。校長職になってからは困ったときの近隣の校長先生のご助言は本当にありがたかったです。

今年度も、東西しらかわ小学校長会の運営にあたって何とか務めを果たすことができるのも、周りの校長先生方の支えがあったからです。何かあったときに頼りになる校長先生方が側にくださることは、とても心強く、本当に感謝の気持ちで一杯です。ありがとうございました。

教育を巡る環境は厳しさを増すことと思います。「県南は一つ」を合い言葉に、今後東西しらかわの子ども達のよりよい成長と校長会の益々の発展を心より願っています。

限られた時間の中で

エンジン快調

白河市立白河第五小学校長 井上 久仁夫

昨年度まで、本会の皆さんに支えられ、無事役目を終えることができました。ありがとうございました。おかげさまで4月からメールはめっきり減り、時々、自分のアドレスに空メールを送信して故障していないか確かめたくなるくらいです。

3月に漠然と退職を迎え、漠然と再任用校長の道に進みました。再任用校長としては、数校の教育長訪問に同行し、授業や学校経営について感想を述べさせていただきました。また、学校経営や人事、保護者対応等について相談され、一緒に考えたことくらいが自分にできたことでしょうか。

白河第五小学校での勤務は、やりがいを感じるとともに本当に楽しい日々です。「運も実力のうち」という言葉がありますが、今までずっと楽しい職場で勤務できていることに自分の運の強さを感じます。(一方では「鈍感力」なのかもしれません。)

本校で改めて感じているのは、「子供たちのよさ、教職員の熱心さ、PTA本部役員の熱い想い、地域の温かさ」はどこでも変わらないということです。そのよさを感じながら、再任用校長という1年契約の限られた時間の中で、校長職の集大成も含めてやりたいこと、自分の持っているわずかな指導技術であっても教職員へ伝えてあげたいこと等がたくさん出てきました。

4月から取り組んできた事を振り返ってみると、不要物の撤去、校庭のトラックライン整備、諸表簿の改定、各種行事の見直し、ファイル管理方法の一新等、学習環境整備及び働き方改革につながる職場環境の整備に力を注ぎました。教職員みんなでいろいろアイデアを出し合いながら学校をより良くしていくことは、とても楽しくやりがいのあるものです。

また、本校は次年度創立150周年を迎え、記念事業として、太陽の丘(子供たちの遊び場)復興、白五小水族館設置、記念式典や各種イベント等を計画しています。白五小水族館はすでに完成していますので、是非お立ち寄りください。



【ピンポンパール】

棚倉町立近津小学校長 鈴木 雅人

本原稿の依頼とともに、昨年度の同時期の会報が見本として届いた。昨年度、定年退職を前に記したものである。それを読むと、一年前、感謝の心とともに定年退職を迎えた時の感情を思い出し、懐かしくさえあった。たった一年しか経っていないのに……。不思議な感覚である。そこには、庭先に咲く春を呼ぶ梅花のように、感謝とともに一花咲かせようとしていた自分がいた。

最後の一花を咲かせ終われたか否かは周囲の評価に任せ、自分自身としては、人生の一区切りがついたのかつかないのか分からないまま、4月より再任用校長としての機会をいただき、母校近津小学校長を務めている。昨年度、「次年度も再任用校長として継続」という流れになり「異動」となったのではあるが、今まで経験した異動とはやはり少々感じが違っていた。再任用が決まった時は、「よし継続だ、異動だ！やるぞ！」という思いになったが、やはり今まで経験してきた「異動」とは違っていた。自分で思っているより、エンジンの吹上が悪かったように思うのである。一度は退職した身という思いが、ブレーキをかけていたのかもしれない。

ところが、着任してみれば、元気な子どもたちが目の前におり、否が応でもエンジンは吹き上がった。母校であることはもとより、今年度創立150周年を迎えたということ、そして何よりも我が後輩たちが素直であること、それらが私の校長としてのエンジンを吹き上げさせたのかもしれない。「まだまだ捨てたもんじゃない、若いもんには負けやしない。」そんな思いが日が経つにつれて強まってきた。周囲の迷惑顧みず……。笑)

素直な子ども達を見るにつけ、「学校としてこの子たちに何ができるのか、この近津の地で、この教育環境で、子どもたちをどう育てられるのか」を今まで以上に考える自分がいた。「学校経営」には、マイナスのところを改善するばかりでなく、プラスを何倍にも増やす術を考えることも必要であると思っている。この近津の子たちのよさを更に伸ばす策を考え、実践する機会をもう少し楽しもうと思う。楽しさこそが、エンジンの燃料となる。「俺のエンジン、吹き上がってきたー！」